

# 図書館とラジオ・メディア：1920年代～40年代 アメリカ公共図書館のラジオ放送活動\*

吉田 右子

図書館におけるマスメディアの活用を図書館サービスの局面から考察するために、1920年代から40年代にかけてアメリカ公共図書館でおこなわれたラジオを利用した図書館サービス (Library Radio Broadcasting) を総合的に分析した。図書館ラジオ放送の実践例を提示しながらこの運動を支えるための図書館内部の体制作りや、ニューメディアとしてのラジオをめぐる図書館界に生じた様々な議論を概括し、当時の図書館とマスメディアの関わりについて考察を行った。多くの図書館ラジオ放送の事例は、図書館においてラジオが主にPR活動を目的として利用されていたことを示している。また図書館ラジオ放送ムーブメントにおいて、ラジオ・レファレンスなど実験的な試行が展開されていたことも明らかになった。

## 目次

1. 序章
2. 図書館ラジオ放送実践例
  - 2.1 アメリカにおけるラジオの出現と図書館
  - 2.2 *Library on the Air*
  - 2.3 図書館ラジオ放送の諸形態
3. ALA 図書館ラジオ放送委員会
4. 図書館ラジオ放送をめぐる諸問題
  - 4.1 図書館ラジオ放送をめぐる議論の時代的変遷
  - 4.2 図書館ラジオ放送における様々な課題
5. 終章

図書館ラジオ放送活動に関する略年表

注・引用文献

## 1. 序章

メディアの多様化にともなう情報環境の変容によって、図書館はこれまで保持してきた機能を再考する時期にさしかかっている。図書館資料は電子技術に支えられたメディアを含む多様な情報から編成されるようになり、図書館業務にも情報メ

ディアの変化に伴う実質的な変化が起こっている。このような図書館の変革期を迎え、図書館情報学においてもこれまでの図書中心の資料論を拡張した新しいメディア論が求められている。

図書館情報学におけるメディア論は図書館活動を分析軸として複数の方向から考えることができる。まず図書館が資料として持つ個別メディアの組織化に焦点を当てたアプローチが存在する。またマスコミをはじめとする社会的に生成されるメディア環境と図書館活動の接点に焦点を当てたメディア論もアプローチとして可能である。前者は図書館資料の中に電子メディアが混在することで、図書館の現場に発生し始めている資料組織化に関する課題を克服すべく展開されている領域である。そこには多様なメディアを介して伝達された情報を各メディアの特性に応じて迅速に処理するための主として実務に直接かかわる課題から、図書館の存在意義を問う根源的テーマにいたる複数のレベルの問題が山積している。メディアの過渡期中で、図書館には様々なメディアによってパッケージされた情報を処理していく機関としての役割が要求されており、個別メディアの組織化は今後、継続的に議論がなされていくテーマといえよ

\* 1995年10月17日受理

\*\* よしだ ゆうこ 東京大学大学院教育学研究科

う。一方、後者のアプローチを考えると図書館は同時代のメディア環境に最も敏感に即応すべき社会機関でありながら、メディアに対する実務的アプローチに比べ、多様なメディアをいかにして図書館サービスと関連づけていくのか、あるいは図書館が現在のメディアの状況、特にマスメディアとどのように関わっていくべきか、という視点が現在の図書館情報学には不足している。この理由として考えられるのは、図書館における図書メディアの際だった優位性である。図書が情報メディアとして極めて完成度が高く資料の大半を占めていたため、図書館学においてもメディアというものをそれほど意識する必要がなかったのである。しかも図書館はレコード、テープ、マイクロフィルムなど図書館に蓄積された非活字資料を、視聴覚資料として図書メディアの延長線上に位置づけてきたが、パッケージ情報になりえないマスメディアと図書館のかかわりを深く追究してこなかった。しかし同時代のマスメディアが形成する情報環境は、図書館利用者のニーズや情報活動に深くかかっている。図書館は自らを取り囲む情報環境の構成要素の一部であり、図書館利用者もまたそこに含まれている。図書館の実践や発展を考察していく上でその時代のマスメディアの状況は、考慮すべき重要な要素である。

同時代のマスメディアと図書館のつながりに着目して図書館史を振り返ると、20世紀前半がひとつの節目になっている。19世紀後半に現れたエレクトリック・メディアが市民に普及し、図書館が映画・レコード・ラジオなどをサービスに取り入れ始めたのがこの時代だからである。本稿ではマスメディアと図書館の関係性を追求する試みの一端として、アメリカ公共図書館とラジオのかかわりを、1920年代から図書館界で1つのムーブメントとなった図書館ラジオ放送 (Library Radio Broadcasting) 活動を通して分析する。同時代の最も強力なメディアであったラジオを利用して図書館はどのようなサービスを提供し、実践にあたってどのような問題と対峙していたのかを、図書館ラジオ放送関係の資料を用いて調査した。

本稿では、図書館ラジオ放送が、図書館とマスメディアの二段階のかかわり—PRのための間接利用と図書館活動への直接利用—を提示してい

ることを着眼点として、図書館における放送活動を分析した。すなわち放送活動の開始当初、ラジオはPRのツールとして利用されたが、放送が発展になると、図書館サービスそれ自体をのせるメディアとしてラジオを用いその可能性を追求していくという発展が図書館ラジオ放送活動には見られたからである。本論文では20世紀の初めの図書館ラジオ放送活動を具体的に提示するとともに、ラジオ番組制作活動を支えるための図書館界内部の体制づくりの様子や活動をめぐって生じた様々な争点を拾い上げ、図書館ラジオ放送活動を総合的に検証する。

## 2. 図書館ラジオ放送実践例

### 2.1 アメリカにおけるラジオの出現と図書館

図書館ラジオ放送の実践例を論じる前に、当時のラジオ・メディアについて少し触れたい。電信・電話・無線・映画といったエレクトリック・メディアが市民に普及したのは1920年代であった。新聞・雑誌など従来のメディアと共に、エレクトリック・メディアは市民生活の中に入り込み、人々の行動様式に影響を及ぼすようになった。1929年にはカラマズー公共図書館が、映画の館外貸し出しを実験的に始めた。当初、貸出は教育映画だけに制限されていたが、直に一般映画も貸出対象となった<sup>1)</sup>。映画は英語を解さない移民にとって貴重な情報源であった。

ラジオが出現すると、図書館界は啓蒙のためのツールとしてラジオ・メディアをとらえ、ラジオによって喚起された知的刺激を持続・発展させるために図書館にできることは何かを考え始めた。こうした新しいメディアに対するポジティブな考え方は、主要な電気テクノロジーが、ほとんどアメリカで発明・実用化されていることと無縁ではない。アメリカにおいて新しい情報テクノロジーは、既存のメディアの存在を脅かすものとはとらえられなかった。むしろ新しいテクノロジーは積極的に使いこまれ、それまでのメディア環境の中に取りこまれていった。ゆえに公共図書館のメンバーが地元のラジオ局を通じて、新しい図書についての情報や図書館で行われている様々なサービスについて放送しはじめたことはごく自然なこと

だった。

アメリカ社会においてラジオ・メディアを利用した公共サービスが展開されたことは、アメリカの初期ラジオが持っていた国家的・啓蒙的性質とむすびついている。アメリカ以外の多くの国がラジオを国営化していたことから明らかであるように、ラジオはかなり政府よりの産業であり、政府・軍部に近いラジオ産業は国家政策ときわめて密接な結びつきがあった<sup>2)</sup>。選挙結果など国家的行事の放送が折りにふれて流され、娯楽メディアとして普及していく過程で『パブリック・インタレスト』（公衆の利益）を満たすためのサービスであるという認識<sup>3)</sup>がなされ、この認識が「その後の放送行政の基本理念となった」のである<sup>3)</sup>。つまり放送局は娯楽を提供する一方で、ラジオが公共サービスのための空間を切り開くようなメディアとして普及していくことを望んだ<sup>4)</sup>。このようなラジオ業界の基本方針は、初期の非営利団体によるラジオ放送につながった。1920年代には、ラジオの運営主体は実に多様で、大学・教育機関の多くが放送活動を試行した<sup>5)</sup>。またラジオの家庭への普及率は、1925年には10%足らずであったが、30年代に入ると50%になり、ラジオ放送を受け入れる環境が市民生活に整った。

1922年にウェスティング社のKDKA局を通じて、ピッツバーグ・カーネギー図書館の児童図書館員が子供向けにストーリーテリングを始めた。この放送は番組を受信したニューヨーク州やイリノイ州の聴取者からも反響があった<sup>6)</sup>。1924年の*Library Journal*の調査によれば、すでにいくつかの図書館が地元のラジオ局に番組を持っていた。オレゴン州ポートランド図書館協会は、文学の朗読、特定主題に関する図書の朗読、図書レビュー、推薦図書、特定主題のエッセイ、月ごとのベストブックをラジオ番組として放送していた。ニューアーク公共図書館は博物館と番組を共同制作し、図書館利用促進のPRもおこなった。カンサスシティ公共図書館では、図書館の創立記念日の特別放送を流した。シアトル公共図書館のように、図書館がラジオ局のトーク番組のための図書選択で協力することもあった。タコマ公共図書館ではストーリーテリングを行なった。たいていの場合、ラジオ番組は図書館が企画し実際の放送はラジオ

局によって行なわれていたが、WGY局のように図書館員によるブックトークの時間を設けていたところもあった<sup>7)</sup>。

## 2.2 *Library on the Air*

図書館ラジオ放送は図書館界にとっては試行錯誤をともなう実験的な試みであり、放送規模、活動主体、時期は極めてバラエティーに富んでいる。放送は(1)図書館PR(2)教育機関としての図書館の立場からのラジオ放送(3)ラジオを用いた図書館サービスの3つのカテゴリーに分けることができる。ラジオを利用したレファレンスのような番組が(3)に該当する。この種の番組は割合としては少なく実験的試行であったが、図書館サービスの限界や本質を考察するための好例となっている。

図書館ラジオ放送の実践例は、1940年に出版された放送台本集 *Library on the Air* に集約されており、実際のラジオの脚本の形で、図書館ラジオ放送活動の様子を知ることができる<sup>8)</sup>。同書は、図書館ラジオ放送を便宜的に(1)図書館一般(2)図書館の機能(3)図書館の各部門の業務(4)図書案内(5)著者インタビュー(6)図書レビュー(7)その他のアイデア、の7項目に分類している。(1)に収められた台本では、図書館サービスの変遷(スプリングフィールド公共図書館)、図書館の機能(カンサスシティ公共図書館)、教育の場としての図書館の重要性(カイヤホーガ地区図書館)などが論じられている。

図書館業務や組織をPRする番組も多かった。セントルイス公共図書館が制作した‘The Library Staff’はセントルイス公共図書館調査(The St. Louis Public Library Today and Tomorrow)の一環としてラジオ放送されたトークショーだった。番組ではセントルイス公共図書館の組織図、図書館員教育、図書館員の待遇を報告した<sup>9)</sup>。図書館業務PR番組の中には非常に実用的なものもあった。ソルトレイクシティ公共図書館は、図書館の目録・分類カードの機能を説明する番組を制作した<sup>10)</sup>。図書館組織のPRは、市民に図書館の機構を紹介するためのよい契機だった。番組例としてはシカゴ公共図書館による、読書相談係の業務紹介番組‘The Reader’s Bureau’があった<sup>11)</sup>。中で

も図書館において市民との接触が高いレファレンス部門は、ラジオによる図書館PRの要だった。セントルイス公共図書館ではレファレンス部門についての番組‘Answering Questions in the Reference Department’を制作し、参考図書について解説した<sup>12)</sup>。シカゴ公共図書館は、シカゴ公共図書館読書係とラジオアナウンサーとの対談‘Questions Your Library is Called upon to Answer’で図書館に寄せられる参考質問を挙げ、市民が関心を持つテーマと参考質問の時期的な変化を紹介した<sup>13)</sup>。

聴取者の読書興味を喚起することによって、間接的な図書館PRを目的とした図書レビュー番組も頻繁に制作された。市民の文学に対する関心を高めるため、マサチューセッツ州図書館協会をスポンサーにしてボストン公共図書館は、市民に詩作を勧める‘Poetry as a Hobby for Women’を制作した<sup>14)</sup>。クリーブランドのカイヤホーガ地区図書館による図書レビュー番組‘Book Caravans’は趣味の領域の図書を紹介して、市民を図書館に引き寄せるためのPRを行なった<sup>15)</sup>。地域の代表的な文化人に図書とのかかわりを語ってもらうアトランタ・カーネギー図書館の‘Old Georgiana’、図書館員が地元の作家へのインタビューを行なうビバリーヒルズ公共図書館の‘Meet the Author’などのトークショーもあった<sup>16)</sup>。一般市民がラジオに登場して、みずからの図書館体験を語る番組‘The Problem Solver’はクリーブランド公共図書館で制作された<sup>17)</sup>。

*Library on the Air*には全国の放送に取り組む公共図書館から寄せられた、図書館ラジオ放送のアイデアが多く紹介されている。図書館の文化的催しと運動させた番組、クラシック・コンサートのために関連図書を紹介した番組など、各図書館の特徴が現れている。同じ図書館PRの目的を持つ番組とはいえ、図書館の実際の活動を紹介するものから、なぜ図書館が必要なのかを説く啓蒙的なものまで内容的に幅が広がった。

### 2.3 図書館ラジオ放送の諸形態

1920年代からはじまった図書館ラジオ放送は、ラジオ・メディアが普及するとともに活発になり、30年代にはひとつのムーブメントと呼びうるほど

の盛り上がりを見せた。その中から図書館ラジオ放送を特に積極的に行ない成果を上げ、他の図書館の番組作成や放送業務に影響を与えた、シンシナティ公共図書館・オハイオ公共図書館・カンサスシティ公共図書館の活動例を考察する。これらの図書館ではラジオ放送が図書館サービスの中にしっかりと位置づけられ、しかも多くの聴取者を得ていた。

シンシナティ公共図書館ではKodel Radio Corporationが組織化された1925年の春から、1週間に一度、15分の図書レビュー番組を持つことになった<sup>18)</sup>。ラジオ放送のためのレビュー制作のためには、図書に対する的確な判断力と緻密な分析が要求されたが、図書館員らはラジオという新しいメディアにふさわしいレビューを準備することに誇りをもっていた。レビューに対する市民からの反響はすばやく、番組の翌日には本館・分館に放送された図書のリクエストが寄せられた。レビュー図書のリストを携えて来館する利用者もいた。図書館発行の雑誌*The Guide Post*が創刊されると、ラジオ番組のためのレビューと雑誌編集作業は連携体制をとるようになった<sup>19)</sup>。

オハイオ公共図書館も多彩な番組を制作した。失業問題に関して図書館が果たす役割を講義する社会派番組から、インテリア、ショッピング、化粧品、料理、ビタミンについての図書を紹介するような実用に徹した番組まであった。レギュラー番組の他に特別番組を制作することもあった。たとえば音楽週間にあわせてレコード・楽譜を紹介し、音楽情報について概説した。もっとも人気のある番組は、レファレンス担当者によるトーク番組だった。この番組は図書館が常に市民の情報源となることをPRする目的もあったが、別のぬらい一聴取者に対する図書館のユーモア・センスをアピールももあった。多くの人々は、図書館に対し修道院のようなイメージを抱いていたため、図書館界はそれを払拭することを望んでいたからである。この番組はオハイオ図書館のPRに効果を上げ、聴取者から好意的な反響を得た<sup>20)</sup>。

図書館ラジオ放送の大部分は、図書館活動の中の図書館PRとして位置づけられるが、カンサスシティ公共図書館はラジオ・メディアを直接、図書館サービスのためのツールとして利用していた。

ラジオを図書館PRのためのツールに留めることなく図書館サービスのメディアとして用いることは、図書館活動における新しい可能性を示していた。カンサスシティ公共図書館が1936年にラジオ放送を始めたきっかけは、潜在的な利用者を受け身の姿勢で待つのではなく、図書館から働きかける必要性を日々痛感していたためであった。図書館ラジオ放送は、図書館サービスの範囲から漏れていた人々を対象として利用者の拡大を目指した<sup>21)</sup>。カンサスシティ公共図書館では、レファレンスサービスが市民にとって身近であれば利用率はもっと伸びるだろうと想定し、ラジオ・レファレンス番組‘The Questionnaire of the Air’を設けた。聴取者から参考質問を募集し、選ばれた質問に対する解答を次週の番組で示した<sup>22)</sup>。番組に寄せられた質問は、園芸のような趣味の領域から政治・地理の問題まで多彩だった。解答する際、利用した参考図書もあわせて紹介された<sup>23)</sup>。カンサスシティ公共図書館の試みは、従来、図書館サービスの恩恵を享受しえなかった潜在的利用者に対して、図書館の存在をPRするものだった<sup>24)</sup>。

公共図書館の児童部門は、特に活発に図書館ラジオ放送を行なった。図書館ラジオ放送の出発点だが、ストーリー・テリングであったことから明らかであるように、児童向けのサービスとしてラジオは効果的メディアだった。デンバー公共図書館の児童部では、NBCのKAO局を通じて児童向け番組‘Once Upon A Time’を週1回放送していた。児童書の著者へのインタビュー、出版前の児童図書のストーリーの放送、詩をテーマにした番組制作など多彩な放送活動を展開した<sup>25)</sup>。オクラホマシティのカーネギー図書館が制作協力した子供向けシリーズ‘Junior Book Shelf’は非常に好評だった。生徒の図書館番組視聴にかかわった教員の多くは、図書館の制作するプログラムが、生徒の読書を促進すると認識していた。図書館は子供の読書習慣に最も精通しており、図書をテーマとする番組制作において重要な役割を果たすと認められた。多くの商業ベースの子供向け番組の中で、子供の興味を図書館番組に引きつけるためには、かなり刺激に満ちた図書やトピックを選ぶ必要があったが、図書館は図書を選び、文学

的価値を下げることなく台本化するためのハウツーを持っていた。図書館の制作する子供番組は地域の重要な教育プロジェクトの一つだった<sup>26)</sup>。

また図書館ラジオ放送は教育分野との関わりも深かった。ラジオ放送初期から教育ラジオ番組が制作され、教育現場におけるラジオ利用が推進されていた。教育現場に図書館ラジオ放送を取り入れることで、生徒が特定のテーマへ興味を持ち関心を深めるために図書館を利用する新しい学習プロセスが導入された。たとえばロチェスター公共図書館は、学校の生徒向けに、ブックトークを始めた。図書館は番組に対する生徒や教師の反応を詳細に分析し、番組制作に役立てた<sup>27)</sup>。1930年代に入った時点で、ラジオを使った教育は、もはや実験段階を乗り越えて、学習メディアのひとつとして確固たる位置づけを持っていた。CBSの中継する‘American School of the Air’は1938年には、午後に放送されていたにもかかわらず、3百万から4百万人の聴取者を得ていた<sup>28)</sup>。この‘American School of the Air’制作に関して多くの図書館関係者が協力したが、クリーブランド公共図書館のEffie Power、ニューヨーク公共図書館のストーリーテリング部門主任Mary Gould Davisといった図書館ラジオ放送の活動に携わってきた公共図書館のメンバーたちがアドバイス・スタッフとして含まれていた<sup>29)</sup>。

### 3. ALA 図書館ラジオ放送委員会

図書館ラジオ放送の奨励、放送にかかわる情報の流通、番組のあり方についての討議の場として、1927年にALAに図書館ラジオ放送委員会(Committee on Library Radio Broadcasting)が発足した。本章では、図書館ラジオ放送が軌道にのり、同委員会が最も活発であった30年代を中心にその活動を追っていく。委員会が折々に抱えていた課題を分析することによって、図書館ラジオ放送の持つ問題点が浮かび上がってくるからである。

1928年の会議で図書館ラジオ放送委員会の任務として決議されたのは、(1)図書館ラジオ放送を行なっている、あるいは将来的にラジオ放送を予定している図書館の援助(2)図書館ラジオ放送の奨励(3)一般ラジオ番組における図書と図書館

PR, の3点である<sup>30)</sup>。まず委員会は放送に携わる図書館関係者から、図書館ラジオ放送に対するコメントや意見、体験を収集することから初めた<sup>31)</sup>。調査によって、各コミュニティで個々に展開されていたラジオ放送の内容が委員会に集まってきた。ALAが報告する調査結果を通じて、各図書館は他館の放送概要を知ることができるようになった。放送活動は図書館界にとってきわめて新しい試みであり、手探り状態で制作が進められていた。従って図書館の放送の実践例を集め公表する委員会の仕事は、図書館ラジオ放送に関連する情報を流通させていく上で重要であった。

ラジオ放送初期は、ほとんどすべてのプログラムにおいてアマチュア色が濃く、放送者の番組制作力は横並びだった。その後ラジオ放送が社会的に定着し、高度の放送技術に裏付けられた商用ラジオ番組が30年代から40年代にかけて台頭してきた。大勢のコマーシャル事業者がラジオ界に参入し、広告テクニクを駆使した放送や宣伝活動を行なった。こうした状況の中で図書館ラジオ放送委員会は、図書館制作のラジオ番組が商業番組に比べ劣勢になってきた状況を認識し対策に乗り出した。1936年に委員会は(1)全国中継のブック・ディスカッション・シリーズの立案(2)地方図書館への資金援助(3)教育ラジオ放送への情報提供、の3点の方策を打ち出した<sup>32)</sup>。大企業がラジオ放送に参入し、豊かな財源を利用し宣伝活動のための技巧的な番組を制作する傾向は年ごとに顕著になっていったが、委員会は図書館ラジオ放送の将来についてはあまり悲観的になることなく、公共性を重視する図書館ラジオ放送独自の方向性を模索していた。

委員会は20年代後半から始めた各館の放送活動に関する情報収集も継続して行なっていた。30年代に入ってから、図書館ラジオ放送委員会のメンバーDonald W. Kohlstedtが40館の図書館にアンケートを採った時、90%の館が、地方で図書館ラジオ放送を行なうことの正当性は認められないと答えている。その理由として、図書館ラジオ放送の効果が測定できないこと、一般にラジオ局は図書館番組にゴールデンアワーを提供しないなどの問題点が指摘された。一方、同時期、児童を対象とした図書館ラジオ放送について、委員会のメン

バーJulia L. Sauerが32館を対象にアンケートを行なったところ、8館がレギュラー番組を持ち市民に好評であることが明らかになった。様々な調査から、委員会は図書館ラジオ放送について次のような結論を出した。(1)図書館がラジオ放送に対して有力な人員を確保でき適切な放送時間帯が与えられれば、番組を存続していくことが好ましい。(2)図書館ラジオ放送は、派閥や商業的偏見にとらわれることがないため公平な立場で放送活動を展開でき、図書関係のラジオ番組において特定の役割を担うものである<sup>33)</sup>。

1944年に委員会は、テレビの出現によって発足したALAのビジュアル・メソッド委員会(Visual Methods Committee)と合併し、新しい組織オーディオ・ビジュアル委員会(Audio-Visual Committee)となった。新委員会は、ラジオ・テレビ両分野での図書館の活動を研究し論議するとともに、教育的なプロジェクトへの協力や参加を進めていくことになった<sup>34)</sup>。

#### 4. 図書館ラジオ放送をめぐる諸問題

本章では図書館ラジオ放送をめぐる様々な形で生じた議論を拾い上げながら、図書館におけるラジオ放送活動について考察を行なう。

##### 4.1 図書館ラジオ放送をめぐる議論の時代的変遷

図書館ラジオ放送開始時点においては、図書館ラジオ放送よりもラジオ・メディア自体にかかわる議論が生じた。ラジオ放送が普及した30年代には、図書館ラジオ放送のラジオ番組としての質が問われるとともに、放送局の意向と図書館側の制作姿勢の相違が現れてきた。40年代に入ると、論点は図書館ラジオ放送の効果や番組作りのノウハウへと移行していった。

ラジオが登場した時、図書館関係者はこの新しいメディアが市民の生活に浸透することによって、読書離れが進み市民の足が図書館から遠のくことを予想した。しかし一方で、ラジオで放送されるのは知識の素材であって、図書館は放送された情報の内容を各自が知識として深めていく場所であるというような前向きな考え方もあった<sup>35)</sup>。ラ

ジオが図書離れのきっかけを作り、公共図書館のライバル的存在になる可能性を危惧した図書館界の思惑に反して、ラジオと図書館は協力関係を築きつつあることが、すでに1924年にALAの調査報告によって判明した。多くの公共図書館がラジオ放送活動に着手していたのである<sup>36)</sup>。

20年代になってからは、図書館ラジオ放送をめぐる論議が徐々に現れた。1928年には図書館ラジオ放送委員会のCharles H. Brownに寄せられた、図書館ラジオ放送に関する批判的な手紙が*Library Journal*に掲載された。投稿者は既存のラジオ番組の図書及び文学関係の多くのプログラムのスポンサーが図書館でないことを指摘した。市民は情報収集と娯楽の両面から文学をテーマとした番組を望んでいるのにもかかわらず、その種の番組を担うべき図書館は、図書館PR番組の制作に留まっていることが批判された<sup>37)</sup>。

30年代には、図書館放送のラジオ番組としての質が問題となった。ALA成人教育部のFrances Clarke Sayersは、ALAの調査から図書館ラジオ放送の問題点を導き出した。たとえば放送時間帯であるが、図書館番組はゴールデンタイム以外の時間に放送されるため、聴取者を増やせない要因となっていた。また過度の図書館PRについても問題があった。ラジオ局が図書館に依頼する番組は、新刊図書のレビューかコメントが多かったが、実際にラジオ局の意向に添った番組を制作すれば、図書館は新しい図書への膨大なリクエストを処理し切れず苦しむことになる。現実の図書館が応じられるリクエストには限度がある。従って図書館は提供能力を越えた要求を産み出すような誇大広告をすべきでないが、放送内容はしばしば放送局の意向に左右された。図書館ラジオ放送に関するアンケート調査で多くの図書館員がこの問題を訴えた。さらに人員の問題もあった。図書館で放送技術を持った人員が確保できない場合、ラジオ番組の制作を他にまかせ、図書館は単に番組のスポンサーとなるケースもあった<sup>38)</sup>。

ALAの調査した範囲では、図書館ラジオ放送は時間とエネルギーを費やした分だけの十分な効果があるとはいえず、しかも少数の例外を除くと図書館番組は教育的であるとは言い難い状況にあった。図書館ラジオ放送は、ラジオ番組として確

固たる位置づけを持たず内容的にも散漫な印象が強く、ラジオ局や聴取者の注目を集めることができていなかった<sup>39)</sup>。アンケートから導き出された問題点を踏まえ、Sayersは図書館番組を向上させるための2つの計画を挙げた。1つは、広範囲の地域にまたがるネットワークを通じて放送されるナショナル・レベルの放送の計画であり、自己学習の可能性を市民に提示できるような内容を持った番組が望ましかった。もう一つは地方の図書館が地元のラジオ局を通じて、小規模ながら体系的な番組を制作することであった。この場合、一定のテーマに基づいたシリーズ番組が番組形態として適切であった<sup>40)</sup>。Sayersはラジオを人間の知識欲をかきたてる原動力たるメディアと認識していた。そして図書館はラジオによって生成される知的刺激を維持し、特定主題の累積的な追究への手段を提供する場として位置づけられた。ラジオが提起するテーマが、個人的な読書、研究、思想へと拡張されてはじめて教育的放送は完成するのであり、教育とラジオが補完的に機能するプロセス上で、図書館は極めて重要な役割を果たすとSayersは論じた<sup>41)</sup>。

30年代後半になると、第二次大戦の不穏な空気のもとに、メディアのあり方がとらえ直されるようになった。ラジオは単に娯楽を提供し、知的情報を与えるだけではなく、社会的なメディアとしての役割が求められるようになっていった。図書館、ラジオがともに民主的機関・メディアとしてすなわち言論の自由と、読み書きの自由を維持する砦として存在すべきである、との論調が高まった<sup>42)</sup>。

40年代に入ると、論点は図書館ラジオ放送の効果や制作方法などに移行していく。図書館ラジオ番組は、市民に図書館利用を促す図書館PRの一部として定着していたが、放送のコスト・パフォーマンスが問われるようになってきた。ハートフォード公共図書館のMeredith Blossは図書館間の協力によって、放送コストを削減する方策を提唱した。Blossの構想は図書館ラジオ放送を国家レベル、地方レベルにわけて体系的に制作し、さらに制作の指揮・調整に当たるような中央機関を設立して効率的な番組制作システムを確立するものだった<sup>43)</sup>。

40年代にはラジオ放送が始まって20年近くが経過し、ラジオとともに成長した世代が番組づくりに取り組むようになってきた。彼らにとってラジオは、空気のように自然なものだった。従来、公共図書館においてマイナーな仕事として扱われてきた図書館PRにラジオ・メディアが用いられるようになって、PRは若い図書館員を魅了する領域となってきた<sup>44)</sup>。また40年代には、教育ラジオ番組に携わっていた放送業界の関係者が、図書館ラジオ放送に対して意見を出すようになった。CBSの教育部長Lyman Brysonは、*Wilson Library Bulletin*において図書館ラジオ放送とコミュニティの結びつきを強化するような方向性を持ついくつかのアイデアを提唱した。Brysonは、図書館番組を聴取した上で番組についての意見を述べるモニターのようなボランティア要員をコミュニティから選出することを提案した。限られた予算の中で図書館番組を充実し活路を切り開くために、コミュニティのラジオ批評者(radio reviewer)の意見は番組作成のための貴重な指針となることが予想された<sup>45)</sup>。

#### 4.2 図書館ラジオ放送における様々な課題

次に図書館ラジオ放送に関して、当時挙げられていた個別の問題について検討する。

図書館ラジオ放送が常に対峙していた問題の一つに、図書館番組のための台本作成があった。地方で図書館ラジオ放送に従事している図書館関係者にとって、台本作成は困難な作業だった。40年代に入ってアメリカ教育省は、図書館ラジオ放送台本の収集と頒布を行なうようになった。教育省に集められた台本には専門家によって準備されたものもあり、これらの台本を地方の図書館が自館のニーズにあわせて借り受けるシステムができあがった。同時に各図書館が、自ら制作した図書館ラジオ放送原稿を、教育省に送ることも奨励された。デンバー公共図書館が制作した台本のようにきわめて評価が高く、他の地域で再放送されたものもあった<sup>46)</sup>。前述の放送コスト削減のための提案をしたBlossは、台本の問題についても言及した。すなわち図書館ラジオ放送にかかるコストの大部分が、台本準備に費やされていることを指摘した上で、台本作成の中央機関を設立して、集

中のに台本を作成することを提案した。専門的に台本作りにとりくむ場を設定し、制作のためのシステムを構築することで、図書館ラジオ放送が他の教育番組と同じレベルで活動を展開できるようになることが期待された<sup>47)</sup>。

次に図書館ラジオ放送の効果について論じる。ここではカンサスシティ公共図書館の具体例を取り上げる。カンサスシティ公共図書館では下降の一途をたどっていた貸出し率が、1936年に図書館が週1回の3つの番組を持つようになってから増加しはじめた。ラジオで言及した図書は、必ず何らかの形で貸し出しに影響した<sup>48)</sup>。またバカンスにあわせた特別番組の制作によって休暇中の貸出数は、前年の同じ月を約2000冊上回った<sup>49)</sup>。さらにノンフィクションのPRに力を入れた結果、フィクションの貸出し記録はほとんど変動がなかったのに対し、ノンフィクションの貸出し記録はほぼ倍増した。また1938年11月の調査で、カンサスシティ公共図書館が制作した子供番組は、大カンサスシティで19%の聴取率をとった。この時間帯にはローカル・グループ内にKMBC局の‘Let’s Pretend’やMutual Networkの‘Lone Ranger’などの子供にとって魅力的なライバル番組があったが、その中で図書館は善戦し25%の聴取率をとっていた。夕刻の時間もNational Networkの‘Chesterfield’や‘Raleigh-Kool’といった番組と競合し、11%の聴取率を確保した。カンサスシティにおける図書館ラジオ放送は、商業的な番組と比肩する番組を制作していたことが聴取率調査から明らかになった<sup>50)</sup>。

次に図書館ラジオ放送における大きな課題であったコマーシャルリズムについて考察する。図書館が制作するラジオ番組と特定商品の広告を目的としたコマーシャル事業者のラジオ番組は全く別の方向性をもっており、同じ土台で考えることはできない。しかし実際の活動はあくまでも放送業界の枠組みの中で行なわれていたため、図書館界は放送活動に加わることによって、これまで経験しなかった営利団体との競争に直面することになった。クリーブランド公共図書館のFred Myersは図書館番組の台本製作者の立場から、図書館ラジオ放送に対し、商業番組の評価と同じ視点に立って問題を提起した。まずMyersは図書のドラマ



化を批判した。プロの女優を起用したラジオドラマと比較すると、図書館番組のドラマは質的に劣り、図書館の利用者の獲得にも逆効果であると述べた<sup>51)</sup>。そして番組作りに際し、図書館員としての独自の見地を維持しながらも、聴取者の立場に身を置くことの重要性を主張した。さらに図書館の利用カードを持っていない聴取者が番組を聞いて、図書館カードを作りたいと思うようになるか否かが、図書館ラジオ放送の成果を見る上での一つの指標であると訴えた。Myersは図書館放送担当者が広告の基本ルールを人気番組を聴くことによって学び、その種の番組がいかにして聴取者をひきこんでいるか研究すべきであると考えていた。人気番組のパタンをつかむことによって、成功する番組のタイプを発見することができるからである<sup>52)</sup>。

ラジオの社会的定着によって初期放送システムにみられるような実験番組は影をひそめ、徐々に番組のパタンが固定化していった。スポンサー番組が主流をしめるようになってきたラジオ放送の中にあっては、図書館ラジオ放送のような公共番組も商業番組の織りなすラジオ番組のパタンを踏襲せざるをえなくなった。図書館放送プログラムはそれまでのラジオ番組としては特殊な形式から、より一般的なものへと変化した。図書館ラジオ放送は図書館PRのための手段としてのみ存在しているのではなく、図書館が番組を流し市民が家族ぐるみで番組を聴取しそれが読書習慣へ導かれることが、図書館がめざす成人教育の最初のステップであると考えられるようになってきた。つまり図書館ラジオ放送は図書館の貸出し率を増加させることを唯一の目的とするのではなく、番組放送それ自体が一つのサービスであると認められるようになった<sup>53)</sup>。図書館ラジオ放送を成功させていたロチェスター公共図書館では、ラジオ番組をPRのためのメディアとしてでなく、コミュニティに対する新たな図書館サービスの機会としてとらえていた<sup>54)</sup>。

最後に、同時代の図書館関係者のラジオ観をまとめてみたい。ラジオは、1930年代には図書館PRのためのツールとして、図書館ラジオ放送ムーブメントを巻き起こすまでの力を持ったメディアとなっていたことは事実であるが、ニューメ

ディアとしての評価は、必ずしも定まっておらず、多様な解釈と既存のメディアにおける位置づけが議論されていた。中でも図書館界では図書メディアとの対比でラジオ・メディアを論ずる関係者が多かった。コロンビア大学教員養成カレッジ附属図書館のMary E. Townesは、記録する方法において500年もの間、確固たる地位を維持してきた印刷という概念が、電気メディアの出現によって揺り動かされていることを指摘した。そして大衆教育の領域で15世紀に出版が果たした役割を、20世紀においてラジオと映画が担うことになることと示唆した。Townesは、図書館が記録された知識の収集という観点から図書メディアを受容してきたのであれば、エレクトリック・テクノロジーによるメディアをサポートすることにも、同様の理由を当てることは可能であると考えていた<sup>55)</sup>。従来とは違ったメディアを使うことに関して、Townesは図書館の教育理念が個人を重視するものである以上、個人にとっての教育手段に合えば、図書館は図書以外のメディアを積極的にツールとして用いるべきだと主張している<sup>56)</sup>。シンシナティ公共図書館Alice B. Coyは、図書館は印刷術発明以前から存在し、知識の伝播の方法の変化と歩調をあわせてきたのであり、ラジオ放送はサービスのための新しい機会としてとらえるべきであると述べた<sup>57)</sup>。

ラジオやテレビが、読書や映画に替わって人間のレクリエーション・教育活動の主要なメディアになっていくのか否かについての論議もあった。現在のエレクトロニック・メディアをめぐる論議と同じように、新しいメディアが完全に古いメディアに取って代わられるとする極端な意見から、メディアの共存を説く中庸説まで様々な意見が存在していた。図書館ラジオ放送ムーブメントの中心人物であったカンサスシティ公共図書館のKohlstedtの「時代の流れに歩調を合わせることによって、図書館が新しい目的を達成することができるなら、我々の能力を最大限に発揮するために新しい機器を利用するという点で、図書館ラジオ放送は十分価値がある」という主旨の発言は、放送に携わった図書館関係者のラジオ及び放送に対する意見を代表するものと考えてよいだろう<sup>58)</sup>。

## 5. 終章

Frances Henne は1941年に *Library Quarterly* に、論文 'Library-Radio Relationships' を発表し、1920年代から1930年代の図書館ラジオ放送における様々な試みを総括した。Henne によれば、ラジオが図書館と関わりを持ち始めた初期には、図書館が直接ラジオ番組制作に携わることが多かった。しかし商業的なラジオ番組との競争激化、予算や人材の不足、ラジオ番組の中身が市民に受け入れられないなどの理由から、図書館はラジオ局の番組制作に協力することが多くなっていった<sup>59)</sup>。確かにラジオがメディアとして未熟であった時期には実験的放送が許容されており、内容的にも非娯楽的要素が強い番組が多く制作された。そうした番組は制作方法、仕上がりにおいてアマチュア色が濃かったが、図書館ラジオ放送もその種のラジオ史上初期の実験的放送として位置づけられる。その後カンサスシティ公共図書館、ロチェスター公共図書館、シンシナティ公共図書館など限られた図書館がラジオ放送に成功したことを除けば、ラジオ放送を実験的に行っていた多くの公共図書館は、予算や人材の不足などからラジオ番組の直接制作から徐々に手を引いていった。アメリカ・ラジオ史において、その初期にラジオ番組を持っていた各種の協会、大学、教会など小規模団体・非営利団体の多くが財政基盤の弱さを理由に、次第に商業的な競争の中でラジオ番組から撤退を余儀なくされていった図式は、図書館ラジオ放送にもあてはまる<sup>60)</sup>。図書館ラジオ放送には様々なバリエーションがあり、ラジオ・メディアの時代的変遷によって変化した。しかしながらラジオを図書館の存立を脅かすメディアとしてとらえるのではなく、両者の協力のもとに、ラジオ・メディアを図書館活動推進のために利用していくという姿勢は図書館ラジオ放送において貫かれた。「図書館が長い歴史を持つのに対し、ラジオの方は新しい発明である。しかしながら共通の目的のために両者が協力していくために必要な経験はそれぞれ十分に積んでいる」というCBSの教育ラジオ・ディレクターLyman Brysonの言葉が当時の図書館とラジオの関係を端的に表現して

いる<sup>61)</sup>。

これまでラジオは図書館史においてレコード・映画と同列に図書館にストックされた視聴覚資料としてのみ言及されてきた。しかしながらテープレコーダー実用化が1948年であったことから明らかであるとおりに、図書館ラジオ放送をストック情報として使うための、技術的基盤は、図書館ラジオ放送が開始されていた時期にはできあがっていない。すなわち図書館ラジオ放送におけるラジオ・メディアとは、あくまでも図書館における特殊資料ではなく図書館活動のためツールであったことは、放送ムーブメントを図書館史上に位置づける際に留意すべき点である。ここでラジオがいかなる形で図書館活動に用いられたのかを、第2章で挙げたパターンに則して再度まとめたい。

### (1) 図書館 PR

図書館ラジオ放送に従事していた図書館関係者のラジオのとらえ方には相違があったが、図書館を主体に新しいメディア利用を模索していく姿勢は共通していた。彼らはラジオを、図書館の活動を活性化し、外部へ図書館の存在をアピールしていくための道具として認識したのである。図書館ラジオ放送は1つのムーブメントとして成熟していく過程で、本格的な放送活動としての要件を整えていったが、図書館 PR がその出発点となっていた。ラジオによる図書館 PR が可能になったのは、エレクトリック・メディアがすでに市民生活に深く浸透していた社会的状況によるところが多い。

### (2) 教育機関としての図書館の立場からの放送

図書館ラジオ放送ムーブメントは、教育現場と密接なかかわりがあった<sup>62)</sup>。教室・ラジオ・図書館の機能を連動させて学習効果を高めていこうとする新しい教育の方向性が、ラジオの導入によってもたらされた。ラジオと図書のような、異なるメディアを組み合わせることによって、学習の相乗効果を高めることを目的としたラジオ教育は、今日の複合メディアによる学習方式の基盤をつくった。アメリカでは1930年代から継続して情報機器を使った教育を模索してきたのである。

### (3) ラジオによる図書館サービス

ラジオは、1対不特定多数のコミュニケーション・メディアであった。一方、図書館サービスは、

インタラクティブなコミュニケーションを必要とする。このコミュニケーション様式の相違に着目した図書館関係者は、ラジオの受動性に対し、図書館利用及び読書の能動性を強調した。すなわちラジオは図書館利用あるいは読書への刺激剤にすぎず、市民の読書は自らが図書館に出向き、主体的に学ぶことによって完成すると考えられていた。だが一方でラジオメディアには弱いながらもリクエストに代表されるような、ラジオと聴取者との双方向性のコミュニケーション機能が備わっていたことを見逃すことはできない。ラジオが持つメディアとしての多面性が、「ラジオによるレファレンスサービス」という実験的試みに結び付いた<sup>63)</sup>。

次にアメリカのラジオ史に見られる地域を中心とした発展形態と図書館ラジオ放送の関連について言及したい。アメリカ・ラジオは市民レベルから盛んになった無線活動を発展の原点に持つ。アメリカのラジオは最初からコミュニティに根ざしたメディアであり、現在でも多数のローカル放送局を中心とした放送形態をとっている。図書館ラジオ放送もコミュニティ放送の一環として始まった。その後もほとんどの図書館ラジオ放送が地方の単館レベルで行なわれたところに、地域密着型のアメリカ・ラジオ放送の特質が現れている。地域メディアという観点から見ると、図書館ラジオ放送はコミュニティの文化拠点である図書館と同時代のメディアの機能がうまくかみあって発展した活動としてとらえることができる。換言すればアメリカにおける初期ラジオの発展のベクトルが図書館活動のベクトルとある部分で重なっていたため、図書館ラジオ放送というムーブメントが起り得たのである。

また初期のラジオ・メディアの持っていた社会的位置づけも図書館ラジオ放送の実践と深い関係を持っていた。ラジオは20世紀前半には社会進歩のための新しいテクノロジーとして意味づけられており、公共サービスを展開するためのメディアとして捉えられていた。こうした理念が図書館におけるラジオ放送の実践へとつながったのである<sup>64)</sup>。本稿ではラジオという新しいメディアと図書館の関係を、図書館における放送活動を中心に調査を進めてきた。当時、図書館はかならずし

も明確なビジョンをもってラジオを導入したわけではなかった。しかし試行錯誤も含めた図書館ラジオ放送の実践例と、放送活動をめぐって生じた議論は、図書館とマスメディアのあり方、さらには、図書館サービスの範囲を問うような論点を包括している。

論文をしめくくるにあたって、再びメディア論に言及したい。序章でも述べたとおり、現在図書館情報学では新しいメディア論が求められている。これまで図書館情報学におけるメディア論は、メディアの種別ごとに単発で討究される傾向にあった。しかもその取り上げ方は、図書館において新たなメディアをどのように処理加工していくかというテクノロジカルな論議に偏っていた。テクノロジーとメディアと社会の関係について水越伸は次のように述べている。

メディアは、大衆であり、個人である私たちが日常生活を営む社会のなかで想像され、記号化され、生成される。メディアは、テクノロジーを内包しながら、さまざまな社会的要因の介在によって社会的様態をととのえていくものである<sup>65)</sup>。

水越はメディアと社会のかかわりを政治的観点や権力の布置の分析から探り、社会科学的視点をもったメディア研究の必要性を説いている<sup>66)</sup>。図書館が社会的機関として存在している以上、図書館情報学におけるメディア論もまた、メディアと利用者の関係を社会的コンテキストと結び付けて考察していくような方向性を持つ必要があるのではないだろうか。

本稿ではメディア論における歴史社会的アプローチを意識しながら、図書館とラジオ・メディアのかかわりを追ってきた。様々な電氣的発明がもたらした文化様式は、現在のマスメディア社会の基点になっている。そのようなメディアの転換期に、アメリカ図書館界が、主体的に新しいメディアを図書館活動に取り込んでいた事実は、図書館情報学におけるメディア史上、極めて重要であり、図書館ラジオ放送ムーブメントに付随した論点を整理していくことで、図書館とマスメディアの関わり的一端を明らかにすることができる。

【図書館ラジオ放送に関する略年表】

年	図書館ラジオ放送をめぐる動向	ラジオ・メディア・アメリカ社会
1920		最初のラジオ放送 (KDKA 局の定時放送)
1922	ピッツバーグ・カーネギー図書館, ラジオ放送を開始	有料放送開始 全国で500以上のラジオ局開局
1923		WEAF を中心にチェーン放送よ開始 『タイム』誌創刊
1925	シンシナティ公共図書館, ラジオ放送を開始	
1926		NBC の設立
1927	ラジオ放送実施館10館をこえる ALA Committee on Library Radio Broadcasting 発足	初のトーキー映画『ジャズ・シンガー』
1928	ALA 広報部, ラジオ放送開始	NBC が全国チェーン放送体制を確立
1929	カラマーズ公共図書館, 映画貸出開始	大恐慌の発生
1930		ラジオの世帯普及率50%を越える
1931		コマーシャル放送が盛んになる
1932		NBC がテレビジョン実験放送開始
1933		ルーズベルトの『炉端談話』(CBS)放送開始
1935	'American Town Meeting of the Air' 放送開始	
1937	プリンストン大学ラジオ研究所設立	
1938	'American Town Meeting of the Air' 聴取者300万人を越える	オーソン・ウェルズの『宇宙戦争』大パニックを引き起こす
1939	Committee on Library Radio Broadcasting, NBC との連携強める	第二次世界大戦勃発
1940	Committee on Library Radio Broadcasting と Visual Method Committee が合併して Audio Visual Committee となる	
1941	初めての図書館テレビ番組(NBC) LC の Radio Research Project 開始	

注：水越伸『メディアの生成：アメリカ・ラジオの動態史』を参考に作成

## 注・引用文献

- 1) Stone, C. Walter. "‘Mass Media’ and Libraries," *Encyclopedia of Library and Information Science Vol.17: MALAWI to METRO*. Kent, Allen and others, eds. New York, Dekker, 1976, p. 231-232.
- 2) 水越伸『メディアの生成：アメリカ・ラジオの動態史』同文館，1993，p. 47.
- 3) 同書，p. 104, 136.
- 4) 同書，p. 135.
- 5) 同書，p. 158-160.
- 6) "A New Kind of Story-Telling," *Public Libraries*. Vol. 27, No. 8, 1922, p. 502.
- 7) "The Use of Radio by Public Libraries," *Library Journal*. Vol. 49, No. 12, 1924, p. 581-582.
- 8) Loizeaux, Marie D. ed. *Library on the Air*. New York, Wilson, 1940, 364p.
- 9) *Ibid.*, p. 62-71.
- 10) *Ibid.*, p. 72-74.
- 11) *Ibid.*, p. 89-98.
- 12) *Ibid.*, p. 112-118.
- 13) *Ibid.*, p. 128-136.
- 14) *Ibid.*, p. 204-211.
- 15) *Ibid.*, p. 222-231.
- 16) *Ibid.*, p. 251-271.
- 17) *Ibid.*, p. 99-111.
- 18) Coy, Alice B. "Radio and the Library," *Library Journal*. Vol. 52, No. 12, June 15, 1927, p. 631.
- 19) *Ibid.*, p. 632.
- 20) Noon, Paul A.T. "Be Sure to Listen Next Week," *Wilson Library Bulletin*. Vol. 16, No. 7, Mar. 1942, p. 558.
- 21) Kohlstedt, Donald W. "Library Opportunities," *Library Journal*. Vol. 61, No. 22, Dec. 15, 1936, p. 939, 969.
- 22) Loizeaux, *op. cit.* 8), p. 159-164.
- 23) *Ibid.*, p. 158-164.
- 24) Kohlstedt, *op. cit.* 21), p. 969.
- 25) Watson, Katherine. "Radio's White Swan," *Library Journal*. Vol. 65, No.9, May 1, 1940, p. 358-359.
- 26) Brittain, Mary Elizabeth. "Junior Bookshelf on the Air," *Library Journal*. Vol. 66, No. 19, Oct. 1, 1941, p. 806.
- 27) Sauer, Julia L. "Three and a Half Years on the Air," *Library Journal*. Vol. 63, No. 3, Feb. 1, 1938, p. 98.
- 28) Fisher, Sterling. "New Experiments in Radio Education," *Bulletin of the American Library Association*. Vol. 32, No. 11, Oct. 15, 1938, p. 742.
- 29) Keith, Alice. "Education by Radio and Library Cooperation," *Wilson Bulletin*. Vol. 6, No. 7, Mar. 1932, p. 551.
- 30) Brown, Charles H. "Radio Broadcasting Round Table," *ALA Bulletin*. Vol. 22, No. 9, 1928, p. 454.
- 31) *Education on the Air: First Yearbook of the Institute for Education by Radio*. Columbus, Ohio State University, 1930, p. 181.
- 32) Ulveling, Ralph A. "Library Radio Broadcasting," *ALA Bulletin*. Vol. 30, No. 5, May, 1936, p. 408.
- 33) Hyses, Faith Holmes. "Library Radio Broadcasting," *ALA Bulletin*. Vol. 31, No. 9, Sep. 1937, p. 580.
- 34) Kohlstedt, Donald W. "Library Radio Broadcasting," *ALA Bulletin*. Vol. 34, No. 9, Sep. 1940, p. 592.
- 35) "Radio and the Library," *Library Journal*. Vol. 49, No. 2, Jan. 15, 1924, p. 92.
- 36) "The Use of Radio by Public Libraries," *Library Journal*. Vol. 49, No. 12, 1924, p. 581.
- 37) "Library Radio Broadcasting," *Library Journal*. Vol. 53, No. 8, Apr. 15, 1928, p. 357.
- 38) *op. cit.* 31), p. 181-182.
- 39) *Ibid.*, p. 183-184.
- 40) *Ibid.*, p. 184.
- 41) *Ibid.*, p. 185.
- 42) Fisher, *op. cit.* 28), p. 741.
- 43) Bloss, Meredith. "Hartford Stresses Use of Radio: Suggests Central-Script Writing Project," *Wilson Lib. Bulletin*. Vol. 16, No. 5, Jan. 1942, p. 369-370.
- 44) Drickamer, Jewel A. "Junior Librarian Looks at Library Radio Publicity," *Wilson Library Bulletin*. Vol. 17, No. 4, Dec. 1942, p. 342-343.
- 45) Bryson, Lyman L. "Libraries and Broadcasting," *Wilson Library Bulletin*. Vol. 18, No. 13, Nov. 1943, p. 226-227.
- 46) Kohlstedt, *op. cit.* 34), p. 591.
- 47) Bloss, *op. cit.* 43), p.369-370.
- 48) Hyers, *op. cit.* 33), p. 580.
- 49) Kohlstedt, *op. cit.* 21), p. 969.
- 50) Kohlstedt, Donald W. "Is Library Radio Broad-

- casting Worth While?," *Library Journal*. Vol. 65, No. 9, May 1, 1940, p. 366-367.
- 51) Myers, Fred L. "Securing and Using Radio Time," *Wilson Library Bulletin*. Vol. 14, No. 5, Jan. 1940, p. 365.
- 52) *Ibid.*, p. 368.
- 53) Schulze, Mildred E. "This is the Public Library Speaking!", *Wilson Library Bulletin*. Vol. 18, No. 7, Mar. 1944, p. 527.
- 54) Loizeaux, *op. cit.* 8), p. 325-334
- 55) Townes, Mary E. "New Aids for Familiar Purposes," *ALA Bulletin*. Vol. 34, No. 12, Dec. 1940, p. 691.
- 56) *Ibid.*, p. 692.
- 57) Coy, *op. cit.* 18), p. 632.
- 58) Kohlstedt, *op. cit.* 50), p. 368.
- 59) Henne, Frances. "Library-Radio Relationships," *Library Quarterly*. Vol. 11, No. 4, Oct. 1941, p. 450.
- 60) 水越, 前掲 2), p. 155.
- 61) Bryson, *op. cit.* 45), p. 237.
- 62) Keith, Alice. "Education by Radio and Library Cooperation," *Wilson Bulletin for Librarians*. Vol. 6, No. 7, Mar. 1932, p. 550-552.
- 63) 水越, 前掲 2), p.78.
- 64) 同書, p. 174.
- 65) 同書, p.12.
- 66) 水越伸「80年代のメディア変容とメディア論の構図：非マス・メディア系情報媒体を包括する研究枠組みの展望」『メディアと情報化の現在』石坂悦夫ほか編, 日本評論社, 1993, p. 392-394.

American Public Library and Broadcasting  
— Library Radio Broadcasting Movement 1920-1940 —

Yuko YOSHIDA

*Graduate School of Education, University of Tokyo*

To examine relationship between library and massmedia from aspect of library service, it is analyzed Library Radio Broadcasting 1920-1940 by American Public Libraries in this paper. Showing examples of these activities, it was outlined organization of special committee in ALA for this movement and considered various discussions about radio as a new media. As the results of this study, it was found that many libraries used radio as tool for library P. R. It was also proved that it made some experimental attempts as radio reference service in Library Radio Broadcasting movement.